第３章　まちづくりの基本的方向

望ましいまちの姿を実現するために、住民・事業者・行政が協力して行うべきまちづくりの方向を、望ましいまちの姿ごとに次のように設定します。

１.「身近な自然を守り育てるまち」を実現するために

> *身近な自然を守り育てるまち*
>
> **里山、田園のあるまちづくり**

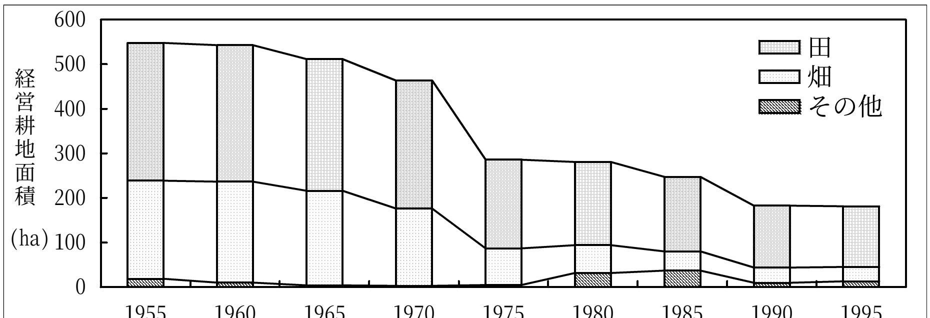
大草丘陵から愛知青少年公園を経て三ヶ峯丘陵にいたる地域には、人手によって成立し、維持管理されてきたアカマツやコナラの雑木林が広がっており、まとまった緑地を形成しています。

里山は、このような樹林や周囲の農地、ため池、湿地、小川、草地等が一体となって形成された多様な環境であり、植物や鳥、昆虫等さまざまな生物が生育・生息し、多様な生態系を形成しています。なかには、シラタマホシクサやハッチョウトンボ、ギフチョウ等の貴重な動植物も生育・生息しています。また、愛知青少年公園や三ヶ峯丘陵には、分布域が限られていると考えられるモンゴリナラも見られます。

一方、香流川沿いに広がる農地は住民にとって身近な自然としての役割を果たし、農地を中心として用水路、畦、土手や堤等があり、カエルやトンボ等の身近な生物が生息しています。

しかし、近年は土取りや開発行為、商業施設の立地や農家の分家の建設等により、里山や香流川沿いに広がる農地の土地空間そのものが虫食い状に失われつつあります。また、下草刈り等の手入れ不足による里山の質の低下、農業従事者の高齢化や後継者不足等による農地の休耕地化が進んでいます。

このような特徴を踏まえ、身近な自然を守り育てるまちの実現のため、里山や農地を空間として保全するだけでなく､動植物の保護や里山の管理システムの構築を含め、「里山、田園のあるまちづくり」を進めます。



経営耕地面積の推移

[資料：愛知県統計年鑑]

身近な自然を守り育てるまち

豊かな水辺のあるまちづくり

本町には、まちの南東から北西に流れる香流川をはじめとする15の河川と、80を超えるため池があります。

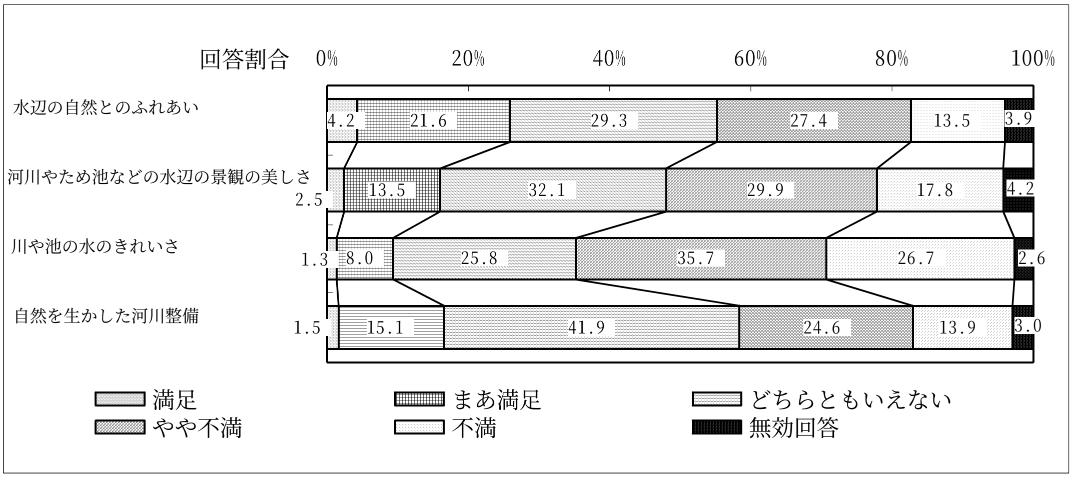
香流川は、香桶川合流部付近から上流では護岸されているものの水際植生が見られ、カワムツ等の魚類や底生生物を中心に、いろいろな種類の動物が生息しています。しかし、香桶川合流部付近から下流では流域の市街化が進み、汚れた河川に生息する生物を中心とした比較的単純な生物相となっています。

香流川の支流には、護岸されて水際植生や生物の生息がほとんど見られない河川と、護岸されてはいるものの水際植生があり比較的生物の見られる河川と、全く護岸されていない河川があります。

一方、ため池は、農業の衰退等にともない、本来の農業用施設としての機能は低下していますが、水際植生が豊かで生物の生息環境としての機能に優れたアヤメ池、生物の多様性は低いと考えられますが水面が大きく鳥の休息地となっている立石池、公園化され住民に親しまれている杁ヶ池等、さまざまな性格をもつため池があります。

しかし、近年は工事による濁水の流入や人口増加等による河川やため池の水質悪化、護岸等の改修工事の実施、土地区画整理による河川の暗渠化やため池の消失等により、生物の生息できる自然豊かな水辺は減少しており、水環境に対し不満をもっている人が多くなっています。

このような本町の特徴を踏まえ、身近な自然を守り育てるまちの実現のため、動植物が生育・生息できる、「豊かな水辺のあるまちづくり」を進めます。



住んでいる地区の水環境に関する満足度

[資料：1999(H11)年住民アンケート]

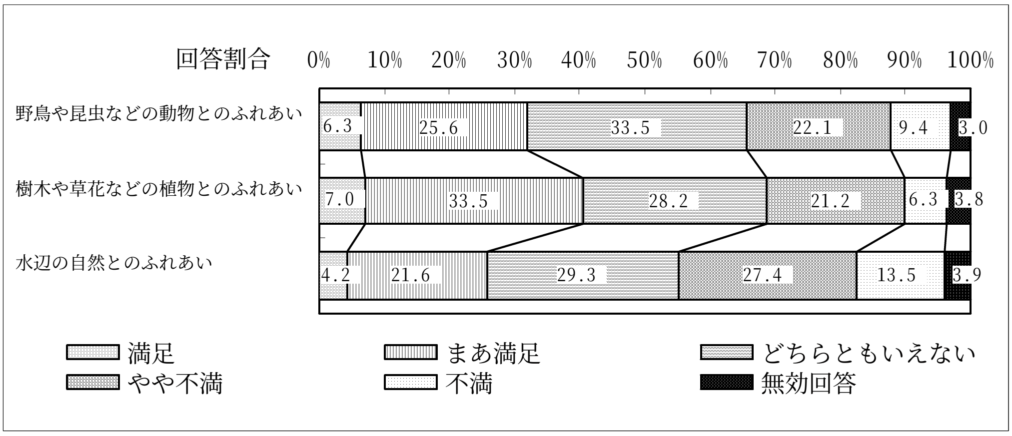
身近な自然を守り育てるまち

自然とふれあえるまちづくり

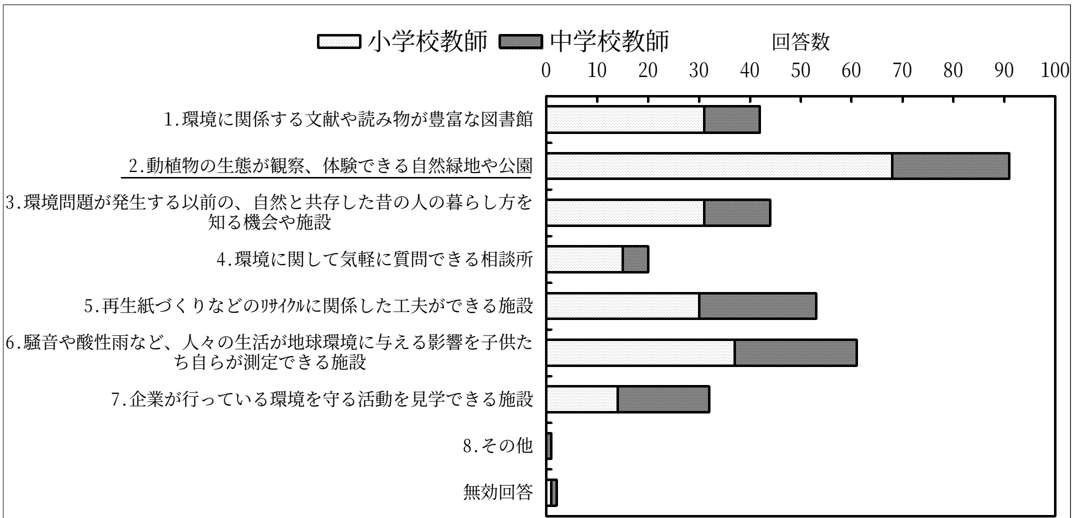
本町の恵まれた身近な自然を守り育てるためには、まず、私たち一人ひとりが身近な自然にふれ、その素晴らしさを知り、保全することの必要性を認識することが重要です。本町では、植物とのふれあいに満足している人は不満な人より多くなっていますが、水辺の自然とのふれあいには不満をもっている人の方が多くなっています。

また、小学校の先生方は、今後環境教育を効果的に推進するため、動植物の生態の観察や自然体験ができる自然緑地や公園が必要であると考えています。

このような現状から、身近な自然を守り育てるまちの実現のため、「自然とふれあえるまちづくり」を進めます。



自然とのふれあいに対する満足度
[資料：1999(H11)年住民アンケート]



今後の環境教育推進に必要な施設
[資料：1999(H11)年小中学校教師アンケート]